

1. ‘ししわかまる’の養分吸収特性に基づいた施肥技術の確立

(農業試験場環境部 主任研究員 橋本真穂)

‘ししわかまる’では、整枝栽培で窒素施用量を60kg/10a程度とし、緩効性肥料を用いて全量基肥施用、または有機質肥料を用いて基肥30kg+追肥30kg施用することで、収量や可販果率が向上し、‘葵ししとう’と同等の可販果収量が得られる。

2. トマト葉かび病の発生生態と防除

(農業試験場環境部 研究員 南方千景)

日高地域のミニトマト栽培施設において、定植期の資材消毒の実施や、栽培初期の9月～10月にかけてペンコゼブフロアブル、ダコニール1000、ベルコート水和剤を用いた3週間間隔の予防散布の実施が葉かび病の防除に有効であった。

3. 夏秋系スプレーギク新品種‘紀州サマーリンド’の特性

(農業試験場栽培部 研究員 井溪奏一朗)

夏秋ギク型スプレーギクの県オリジナル品種として‘紀州サマーリンド’を育成した。ピンク色のシングル咲き品種であり、消灯後12～13時間の日長条件とすることで安定して開花する。また、草姿の伸長は非常に良く、切り花の重量も既存の品種と同等以上であることから、高い秀品率が期待できる。

4. 高温耐性のあるスターチス有望系統の選抜方法の検討

(農業試験場暖地園芸センター 研究員 出口萌)

スターチスの脱春化の難易を簡易に比較する方法を開発するため、低温処理済みビトロ苗を鉢上げ後、30℃または35℃、5日または10日の条件で高温処理を行い、抽苔への影響を調査した。35℃10日の条件が最も影響が大きく、脱春化の難易を比較できると考えられた。また、この条件を用いて、県育成品種の脱春化の難易を調査した。

4. 冬季の実エンドウハウスにおける既存の設備を利用した制御方法がハウス内温湿度に及ぼす影響

(農業試験場暖地園芸センター 研究員 山野智輝)

ハウス実エンドウの品質不良莢、病害を抑制するため、既存の設備を利用した時の温湿度の推移を調査した。慣行管理では夜間高湿度になり、曇雨天日は日中のハウス内気温が生育適温以下になった。一方、側窓の開度を小さくして終日開放すると、曇天時でも日中の生育適温を確保し、終日高湿度条件を回避した。また、夜間の気温は全閉時と同等の推移を示した。